

青年期の食事についての評価懸念は食事への不安に影響を及ぼすのか

学籍番号 B53080

氏名 香西 紗希

研究史

社交不安障害とは

現在では、社交不安障害を抱える患者が増大している。

社交不安障害 (SAD: Social anxiety disorder: 社会恐怖ともいう) とは他者の注目をあびる可能性のある社交場での著しい恐怖または不安を特徴とし、自身の振る舞いや不安症状を見せることで、恥ずかしい思いをしたり、拒絶されたり、他者に迷惑になったりして否定的な評価を受けることを恐れる病態とされている (朝倉, 2015)。

会食恐怖症とは

会食恐怖症は日本では対人恐怖と類似する障害とされており、DSM-IVは会食恐怖症を一般的な社交不安障害とみなしてその診断特徴を「人前で食べること、飲むことまたは書くことを避けることがある」と記述している。こうした状況では社交不安障害と同様に不安症状が現れやすく赤面、視線、または体臭がほかの人に対して攻撃的になるのではないかと強い不安の形をとることがあると説明している。

目的

本研究では、誰に対して不安を感じ、それを避けたいと思うのか、どのような食事場面で不安を感じ、その場所を避けたいと思うのかを調査するため、食事の相手尺度と食事の場所尺度を作成した。また、周囲の目を気にすることで不安症状が出るのか、それとも身体症状を懸念することにより不安症状が出るのかを検討するため食事についての評価懸念尺度も作成した。さらに、5因子性格テストで測定される性格との関連も分析した。

目的1 「食事の相手に不安を感じるのはどのような要因によるのか」

目的2 「食事の相手を避けるのはどのような要因によるのか」

目的3 「食事の場所に不安を感じるのはどのような要因によるのか」

目的4 「食事の場所を避けるのはどのような要因によるのか」

方法

私立大学文科系学部 228 名に調査用紙を配布した。調査用紙は「社交不安症の評価スケール」、「食事の相手尺度」、「食事の場所尺度」、「食事についての評価懸念尺度」、「Big Five 尺度短縮版」、「フェイスシート」の6つのセクション、85項目から構成されている。

データの分析には、SAS9.2を使用し、「食事についての評価懸念尺度」の因子分析、相関分析、重回帰分析を行った。

結果

本研究を行うあたり立てた目的1である「食事の相手に不安を感じるのはどのような要因によるのか」は相関分析において周囲の目懸念、身体症状懸念、LSAS-Jが食事の相手への不安との間で有意な相関であった。また、重回帰分析においてもLSAS-J、身体症状懸念が食事の相手への不安に対して有意な偏回帰を示している。よって、目的1の食事相手に不安を感じる要因として、身体症状懸念や社交不安が見いだされた。

表5 食事の相手 (不安) を目的変数とした重回帰分析

要因	自由度	パラメータ推定値	標準化偏回帰係数 β	t 値	P
身体症状懸念	1	0.113	0.215	3.68	***
LSAS-J	1	0.423	0.470	8.05	***
		R^2	0.315		***

次に目的2である「食事の相手を避けるのはどのような要因によるのか」は相関分析において周囲の目懸念、身体症状懸念、LSAS-J、Big Five 尺度短縮版の下位尺度である情緒不安定が食事の相手への回避に対して有意な相関であった。また、重回帰分析においてもLSAS-J、身体症状懸念が食事の相手への回避に対して有意な偏回帰を示している。よって、目的2の食事相手の回避要因として、身体症状懸念と社交不安が見いだされた。

表6 食事の相手 (回避) を目的変数とした重回帰分析

要因	自由度	パラメータ推定値	標準化偏回帰係数 β	t 値	P
身体症状懸念	1	0.146	0.258	4.19	***
LSAS-J	1	0.388	0.408	6.62	***
		R^2	0.283		***

次に目的3である「食事の場所に不安を感じるのほどのような要因によるのか」は相関分析において食事についての評価懸念尺度の下位尺度である周囲の目懸念、身体症状懸念、LSAS-Jが食事場面での回避に対して有意な相関であった。また、重回帰分析においてもLSAS-J、身体症状懸念、Big Five尺度短縮版の下位尺度である調和性が食事の場所への不安に対して有意な偏回帰を示した。よって、目的3の食事場所の不安要因として、身体症状懸念、社交不安、調和性性格が見いだされた。

表7 食事の場所(不安)を目的変数とした重回帰分析

要因	自由度	パラメータ推定値	標準化偏回帰係数 β	t値	P
身体症状懸念	1	0.121	0.260	4.16	***
LSAS-J	1	0.245	0.307	4.91	***
調和性	1	0.188	0.151	2.48	*
		R ²	0.224		***

次に目的4である「食事の場所を避けるのほどのような要因によるのか」は相関分析において食事についての評価懸念尺度の下位尺度である周囲の目懸念、身体症状懸念、LSAS-Jが食事場面での回避に対して有意に相関であった。また、重回帰分析においてもLSAS-J、身体症状懸念、Big Five尺度短縮版の下位尺度である調和性が食事の場所への不安に対して有意な偏回帰を示した。よって、目的4の食事場所の回避要因として、身体症状懸念、社交不安、調和性性格が見いだされた。

表8 食事の場所(回避)を目的変数とした重回帰分析

要因	自由度	パラメータ推定値	標準化偏回帰係数 β	t値	P
身体症状懸念	1	0.092	0.217	3.26	***
LSAS-J	1	0.205	0.289	4.34	***
調和性	1	0.166	0.151	2.33	*
		R ²	0.184		***

考察

本研究の結果から目的1～目的4のいずれも身体症状懸念とLSAS-J(社交不安)が影響を受けていた。このことから、会食恐怖症は特定の相手との食事について考えると不安になりやすいという性格的な影響や社交不安症のように周囲の目への懸念により不安を感じるというよりも食事についての身体症状懸念(胃腸の不快感や下痢、吐き気)により起こりやすいと考えられる。これは、過去の食事場面での失敗を想起することで恐怖や不安を感じ、その場面を避けるのだろう。

引用文献

- 中村 剛, 西山 優紀美(2000). 会食恐怖症, 朝倉 聡(2015). 社交不安症の診断と評価 不安症研究 7(1), 4-17.、並川 努, 谷 伊織, 脇田 貴文, 熊谷 龍一, 中根 愛, 野口 裕之(2012). Big Five 尺度の短縮版の開発と信頼性と妥当性の検討 心理学研究 第83巻 第2号 91-99. 貝谷 久宣(2006). 「社会不安障害のすべてがわかる本」講談社 小山 司(2005). 「社会不安障害治療のストラテジー」先端医学社
- Martin M. Antony & Karen Rowa(2011). Social Anxiety Disorder. (鈴木伸一. 貝谷久宣, 久保木富房, 丹野義彦(訳)(2011). エビデンス・ベースト 心理療法シリーズ⑧ 社交不安障害 金剛書店)
- 久保木 富房, 樋口 輝彦, 坂野 雄二, 貝谷 久宣, 野村 忍, 不安・抑うつ臨床研究会(2005). TEXT BOOK OF ANXIETY DISORDERS ダン・スタイン・エリック・ホランダー(編) 不安障害 日本評論社出版 第22章 312-315, 26章 370-373, 31章 444-447.